

対外意識と王権論の転回——近世思想史の新しい「様式」を目指して——

井上 泰至 大川 真
濱野 靖一郎 山本 嘉孝

趣旨説明

(井上泰至)

思想史の語り方の新たな「地平」として問題となるのは、「史料」の位相の拡大である。そこで、思想史学ではあまり注目されてこなかった、通俗的な読み物、地域の境界を語る言説、神話的伝承の集成と編集、和歌や漢詩といった象徴的な文芸をも使い、それに絡む学問自体の編成を意識しながら、思想史を語り直すことを試みてみた。

対象となるのは、十八世紀末から十九世紀初頭にかけての、対外意識の変化と不即不離の王権論の転回である。まず、井上からこの問題について、従来の思想史では使われ

てこなかったテキスト群を核とした整理を試み、大川から従来の思想史の観点に照らして批判的コメントを行った。つづいて、政治思想史および文学史の両隣接分野から、濱野・山本によってこうした語りの有効性と問題点について指摘を受けた上で議論を行い、この方法の可能性について立体的な検証を行った。

宣長登場以前

(井上泰至)

怪談小説の名作『雨月物語』巻頭の「白峯」。讃岐の崇徳院陵に生前和歌を通して交誼のあった西行が参詣、そこに登場した院の亡霊との対話を中心とした小説である。論

点は、保元の乱の院の挙兵が、「王道」に照らして正義であったか否か。院は『孟子』の篡奪革命説によって自己を正当化し、西行は、儒教に本来ある禪讓の教えは、古代の皇室にもみられるとしつつ、篡奪革命説は王朝交替のない日本の国風にあわないうという相対的な議論を展開し、『孟子』を積んだ船は神風によつて沈むという言説まで飛び出す。この議論の背景は何か。

まず、保元の乱という王朝の没落を招いた事件の原因を、天皇家における「骨肉」の乖離に見る歴史意識は、栗山潜峰『保建大記』の存在が大きかった。秋成に近い大坂懷徳堂では、水戸史学への関心が高かった。また、儒教といえども、日本の国風になじむものとなじまないものがあるという議論は、西川如見の町人教訓書『町人袋』を受けたもので、秋成は同じ国学者でも、後に論敵となる宣長とは一線を画する（井上泰至「白峯」の王道論とその背景、『雨月物語論——源泉と主題』笠間書院、一九九九年）。

篡奪革命説の批判については、陶徳民氏の報告がある（『国粹主義と中華崇拜を超えて——五井蘭洲「百王」姓論』の再評価、『東アジア文化交渉研究』1、二〇〇八年三月）。秋成が師と仰いだ懷徳堂の五井蘭洲に、近しい議論がなされていた。蘭洲の論敵であった松岡文雄は、君臣の道を「開闢以来」一貫して存在している最重要な倫理と見なしたので、湯王

武王の放伐を反逆と考えていたが、蘭洲は「君臣の義」はこのような先験的範疇にあるものではなく、歴史的に形成されたものであり、上古においては、「天命」の順守、のうがはるかに重要な意義をもつものであったとする。秋成は崎門・神道と木門との応酬の間をとる蘭洲のバランスのとれた議論を踏まえていたのだろう。もちろん、国学者である秋成は、蘭洲のように『孟子』を弁護する立場にはないのだが。

対外意識の問題に移る。十九世紀初頭の『絵本太閤記』は、秀吉の神像を掲げつつ、彼の外征を無謀だったとする貝原益軒の言説を批判する。書き手の武内確斎は、大坂の町名主で、篠崎小竹・頼山陽らと交わった。この戦争についての一般的な見方であった益軒の言説を正面から否定するものとして、重要な位置にある。彼らに近い中井竹山『逸史』には、文禄の役の初戦の勝利に乗って、明の首都を攻撃し、朝鮮を日本の外藩として編入できたはずだ、とする。

『絵本太閤記』五編序者の松井永喜は旧豊国神社の宝物を管理する妙法院の地下官人で、宣長の学の影響を受けていた。秀吉を外征の神として崇拜する論理は、宣長の外交論『馭戎慨言』とそれに関連する宣長の道歌集『玉鉾百首』の巻末につけられた詠史歌の一群の影響によるものである。

個人的な好き嫌いは別として、宣長学が当時大変魅力的に見えた問題には、目を背けるわけにはいかない。『絵本太閤記』の成功は、続編として『絵本楠公記』『絵本忠臣蔵』を生み出した。靖国の思想的背景に、藤田東湖・吉田松陰の正気歌があること、草莽の志士が命を賭して国事に奔走する彼らの志を詠む時、やはり草莽から身を起こした楠・秀吉・赤穂浪士が「触媒」として詠みこまれ、そうした詩の流れは、「軍神」広瀬武夫の旅順港突撃前に残した「正気歌」までつながること、特に松陰は秀吉を詠みこんでいることなど、既に紹介しておいた（「軍神を生み出す回路」、井上泰至編『近世日本の歴史叙述と対外意識』勉誠出版、二〇一七年）。

秋成の『安々言』は、全編宣長の古道論批判なのだが、特に『馭戎慨言』の神学的外交論について、嘲笑的な言辞も交えてこき下ろしている。信長・秀吉の天下統一や外征は、草薙の剣の神徳によるものだという宣長の説に対し、ならば織豊政権はなぜ短命で終わり、徳川家は三河でどんな神宝を得ていたのかと揶揄し、朝鮮より先に南方から明を討つべきであったという宣長説に対して、庶民の立場で国策を論じようとする立場をわきまえない、政治参加の意志に批判を集中させる。学問とは封建社会における人間関係の機微に通じるものであるとする秋成からすれば、宣長は、「私欲」の人となる。

逆に言えば、宣長学の持つ神秘性と、政治の議論に参加する意志にこそ魅力があったことを、この批判は浮き彫りにしている。対外意識と王権論の問題も、十八世紀という転回を準備した時期には、学問の在り方への意識の変化、そこに登場する神秘性の魔など、思想を育む環境の所在を、文学作品はあぶり出してくれる。

一八世紀の「朝鮮問題」について ——新井白石を中心に—— (大川真)

今回の発表を構想するにあたり、重要な示唆をうけた二つの先行研究を紹介したい。一つは、天狗党が自らの非法的軍事行動を、秀吉の朝鮮侵略と重ね合わせていることを考察した井上泰至氏の論考である（「文禄・慶長の役を記憶する——「復古」／「維新」の前提としての武家説話」、「日本文学」五九—一〇、二〇一〇年）。こうした侵略的、侮蔑的な眼差しが朝鮮に対して常に注がれ、国内外の社会変動期に露骨に表出してきた歴史、そしてそれは現在進行形であることを、私たちは好むと好まざるとにかかわらず直視しなくてはならないことを前掲論文から学んだ。もう一つは新井白石の朝鮮観を扱った井上厚史氏の論考である（「新井白石の朝鮮観」、「環」二三、二〇〇五年）。氏は、新井白石の朝鮮論に初めて使われるようになる「国体」、「我国の恥辱」という

語に注目し、その後、宣長国学、後期水戸学へと続いていく国民的アイデンティティ形成の濫觴を白石に見いだしている。白石が朝鮮国に対して文化面で激しく敵意を燃やした時に蔑視的な発言もしていることは氏の指摘の通りである。しかしながら、白石研究を専門としている私からすると、氏の論述には全面的には賛同できない部分がある。結論から先取りして言えば、秀吉の朝鮮侵略である文禄・慶長の役（壬辰倭乱、一五九二年・一五九八年）の戦後処理が、己酉条約締結（一六〇九年）から百年以上経っても継続していることを白石は冷静に認識しており、従来の朝鮮蔑視的な眼差しとは異なる論述が散見できるのである。白石は、己酉条約締結に至る和平交渉が難航した理由として「此の時の和談の時に朝鮮にてはたゞく先王の墳墓をほりくずされし事、世あらんかぎりのうらみなれば、中々和談の事は心得たりと申すべきやうなしと申す」（新井白石「命を奉り朝鮮使客に教諭す」諺解）と、日本の兵士たちが朝鮮王族の墳墓を破壊したことに求めている。この認識は、明の諸葛元声『両朝平攘録』の記述に基づくと考えられるが、「壬辰之変二日本より彼国先王之墳墓をも堀崩シ候程之事二候得ハ、書簡ニ被認候通日本を不共戴天之讎と存、時節を窺大明之援兵を乞ヒ、復讐之志なと有之候」（平田直右衛門「覚書」一七二一年正月。長崎県立対馬歴史民俗資料館所蔵。田代和生氏によ

り全文翻刻。田代和生「白石・芳洲論争と対馬藩」、「史学」六九―三・四、二〇〇〇年）と、白石と同じく木門の対馬藩江戸詰家老・平田真賢から直接得た情報に裏打ちされていた。儒者にとつて、王家の墳墓や宗廟が破壊されるという事実は、子々孫々まで記憶せねばならない耐えがたい屈辱を受けたことを意味する。白石の朝鮮観では、このことが大きな前提となっており、国王号の復号をめぐる朝鮮側に反発が起こつたのも、墳墓、廟社の損壊に対する積年の怨恨に因ると白石は捉えていた。ただしここで看過してはならないのが、こうした朝鮮の怨恨に対して「彼国の君臣いさゝかも人心あらむには前日の恥を怨恨らずと云事なかるべし」（新井白石「朝鮮国信書の式の事」と、君臣の義という東アジア思想世界の共通の知的基盤から同情を持って語られるということである。敵礼（対等な外交関係）構築という強い意欲から、時に朝鮮に対して侮蔑的な発言も辞さない白石ではあったが、日本が約一世紀前に朝鮮に対して行った非道な侵略行為、特に宗廟や墳墓を破壊したという歴史的事実に対しては、儒教的立場から同情的な理解をしていたことは、重たい意味を持つ。白石は「三韓征伐」に対しても一方で神功皇后の武略を称えながらも、実はそれ以降の日朝交流史に決定的に暗い影を落とすことになったことを指摘している。新羅の文武王が日本の侵攻を食い止めるために、

死後に龍となることを遺勅して水中に葬られたという『三國史記』等に記載のエピソードを取り上げ、「其後我國の兵禍に苦しみ候事、世として是なき事もなく」、「彼國の君臣の我國を憤り恨み愠り候事、誠に万世の讎と思ひなし候故にて候」（新井白石「朝鮮聘使後議」）と、古代から前代まで日本の軍事侵攻によって朝鮮が苦痛を受け、そのことが現在に至っても日本に対する激しい怨念と敵意を生む要因であることを述べている。

コメント

（濱野靖一郎）

本パネルの問題意識は、井上泰至・田中康二編『江戸の文学史と思想史』（ベリかん社、二〇一一年）と、その回答である日本思想史学会二〇一三年度大会「越境する日本思想史——思想と文学の垣根越え」に遡る。思想史研究で「文学」があまり視野に入っていない状況への問題提起であった。そして井上氏を中心に、文学・歴史・思想からなる論集を出した。

尤も、飯田泰三氏や荏部直氏など、政治思想史で文学は重視されてきた。河野有理「福地桜痴と「尊号一件」の百年」（御厨貴編『天皇の近代』千倉書房、二〇一八年）は、「中山もの」と呼ばれる講釈・講談で流布したものが、史実をね

じ曲げたフィクションかつ「京鼻肩の説」を含んでおり、幕末の志士に愛好された状況を論じている。歴史叙述とその型式・書式にも着目し、この題材が衰退していく流れを時代状況の推移に併せ述べた好論である。文学作品乃至は文学的題材の推移の思想史研究として、今後の典型となり得るだろう。

禁書の研究を初め行政が文学に与えた影響や、作品内容の政治性、供給・受容から見る政治状況も思想史のテーマである。思想史研究に今後それが広がり、文学側から思想史を学びに来る状況が望まれる。

コメント

（山本嘉孝）

文学研究を主軸とする者の視点から、今後の日本近世思想史研究において活用され得る史料のジャンルとして、絵本と漢詩の二つを挙げ、その有用性について議論した。

絵本の例に挙げたのは、徂徠門流の著述・編著を多く世に出した江戸の書肆、嵩山房から刊行された高井蘭山（解）・葛飾北斎（画）『絵本孝経』（天保五年序、嘉永三年刊、元治元年再版）である。太宰春台校訂の古文孝経本文に付された注解と挿絵は、軍記や武者絵と深く関連する。近世日本で儒学經典が骨肉化されていく過程では、素読だけで

なく、武者絵の絵解き（江村北海『授業編』巻一「幼学」参照）も重要な役割を果たしたようである。

漢詩の例に挙げたのは、元禄～正徳期の木門（木下順庵門下）による漢詩制作である。和習の排除には林家への対抗意識、正徳二年朝鮮通信使との応酬を機とした漢詩集刊行には、藍弘岳が指摘したように（徂徠学派文士と朝鮮通信使——「古文辞学」の展開をめぐって、『日本漢文学研究』9、二〇一四年）、徂徠一門への競争意識が見て取れる。当時の儒者たちが、学説の内容よりも、漢詩の巧拙によって才智を誇示し合い、競合したことは、日本における儒学の広がり方について新たな視点を提供した。

（井上泰至・防衛大学校教授）

（大川真・中央大学准教授）

（濱野靖一郎・海陽中等教育学校教諭）

（山本嘉孝・国文学研究資料館准教授）